The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	共生の原野
Author(s)	栗本, 英世
Citation	未来共生学. 2015, 2, p. 352-359
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/51792
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

エッセイ

共生の原野

栗本 英世
大阪大学大学院人間科学研究科教授

2007年1月、私は21年ぶりにパリ（Pari）人の村、パチディ（Pachidi）を訪問した。パリ人は、南スーダンの東エクアトリア州ラフォン郡に居住する人口4万人ほどの民族である。私は1978年に彼らの村に住みこんで人類学的なフィールドワークを開始し、1985年末まで数度の調査を継続した。

スーダンでは1983年に内戦が勃発し、1985年になると解放戦線、スーダン人民解放軍（SPLA）の部隊が東エクアトリアにも侵攻し、内戦状況が拡大したため、調査は中断せざるをえなくなった。パリの若者の多数は解放戦線に身を投じ、また多くの人たちが難民や国内避難民になり、国内外に離散した。私は、エチオピアやケニア、そしてスーダンの首都ハルツームなどで、ゲリラ兵士、難民、国内避難民になったパリ人との付き合いを続けた。20年以上続いたスーダン内戦は、2005年にようやく終結し、和平合意の結果、南部スーダンには新しい政府が樹立された。そして2011年には、南部スーダンは南スーダン共和国として独立することになる。

パリの村を再訪することは、長年の夢だったが、2007年になってようやく実現したのだった。「再訪」とはいったが、パチディに行くのはじつははじめてだった。パリ人は、リプル（Lipul）というサバンナ平原の独立丘の周囲に、六つの集落を営んで居住していた。これらの集落は、SPLAの主流派と反主流派の戦闘の舞台となり、1993年2月に全焼した。人びとは、おおむね元の集落単位で新たな生活の場を求めて移動し、リプルの丘は無人になった。六つの集落の一つ、プゲリ（Pugeri）村の人びとは、丘の南方約50キロメートルの原野のなかにある、パチディと呼ばれる場所に新しい居住地を定めたのだった。

写真1．湿地を歩く。2011年9月。

プゲリ村は、私が拠点としていた村で、村人たちとは長い付き合いがある。そのなかで、私はある家族の養子になり、同年齢の若者たちから構成される年齢集団のメンバーになった。パチディは、家族・親族と友人たちが住む村なのである。

22年間続いたスーダン内戦は、2005年1月にようやく終結した。パリの人たちの村々を再訪する機会をえたのは、2007年1月のことであった。すべての村々を回る計画を立て、自動車で行けるところは、道路とはとても呼べない、灌木や草が生い茂った踏み跡のような道をたどった。パチディに行くには歩くしか方法はなかった。途中の村で一泊し、丸二日、無人の原野と湿地を歩いた（写真1）。私たちの一行は10名以上で、その中核は信頼している家族・親族であった。

写真2．村の外に行くときには銃（AK47、カラシニコフ突撃銃）を携行する。2011年9月。

写真3．家屋敷と牛。パチディ村。2011年9月。

内戦は終わったとはいえ、なにが起こるかわからないので、全員が銃を携行していた（写真2）。事実、一泊した村は、2か月前に200名規模の武装集団に襲撃され、掠奪されたばかりだった。乾季だったが、この地域は平坦で二つの川が流れているため、場所によっては胸までの深さがある広大な湿地が広がっていた。プゲリ村の人びとがパチディを選んだのは、この自然環境のゆえであった。川と湿地に守られて敵は接近しにくく、牛と山羊・羊が食べる牧草は一年中あり、川と湿地では魚が獲れる（写真3）。防衛上の利点があるとはいえ、パチディは近隣民族集団のメンバーによる牛の掠奪の被害にたびたびあっている。また、一度だけだが内戦中に武装組織の攻撃を受け、約80名の村人が死亡し、家畜のほとんどを掠奪された。

ようやくたどり着いたパチディには3泊しただけだったが、大歓迎を受けた。この村には商店や市場はない。もちろん、電気も水道もない。いちばん近い町は、40キロメートルほど離れている。したがって客人を歓待するための食材や酒類を、現金で購入することはない。牛と山羊が殺され、ものすごい量の自家製の醸造酒と焼酎がふるまわれた。皆で肉を食べ、酒を飲んで、歌と踊りが続いたのだった。多くの家族、親族、友人たちと再会を喜び合った。文字どおり、彼／彼女たちは、生き延び、生き残った人たちであった。たくさんの人が内戦中に亡くなったが、同時にたくさんの子どもたちが生まれていた。

21年ぶりに再会した人びとのなかに、深く印象を受けた二人がいた。一人は私の姉の娘、つまり姪で、もう一人は年齢組の同輩の男である。21年前には、姪のほうは10代前半の少女で、同輩のほうは20代半ばの若者であった。二人とも、子どものときに小児麻痺（ポリオ）を患って身体が不自由であった。下半身は未発達で、とくに片方の足は腕よりも細く、歩行にはまったく役立たない。身体全体も小さいが、腕の筋肉は発達している。太い杖を頼りに、ふつうの人が歩くのと同じ程度の速さで移動するからである。そのため、手の皮は厚くて固い。

私は、まず二人が、肉体的な弱者は生き残る可能性が低い、苛酷な内戦のなかを生き延びたことに驚かされた。さらに驚いたのは二

人とも結婚して立派な母や父になっていることであった。ハンディキャップがあるにもかかわらず、日常の仕事や、生計維持のための労働を、人並みにこなしているようだった。

南スーダンには、内戦前でも様々な病気が蔓延しており、乳幼児死亡率は世界最悪水準にあった。はじめて村に滞在したときは、ハンセン病や象皮病の患者と出会って衝撃を受けた。ハンセン病の老女は両手の指が半分ほどの長さになっていた。象皮病の男は、下肢が倍ほどの太さに膨らみ、皮膚は象のように固くなっていた。のちに知ったことだが、男性が象皮病を患うと、睾丸がバレーボールほどに腫れてしまう。また、原因は様々らしいが、視力を失った老人たちがたくさんいた。

パリ人の社会では、こうした人たちが「特別扱い」を受けることも差別を受けることもない。目が見えない人には先導役として親族の子どもが付き添っていることが、思い浮かぶ例外だ。目の不自由な人は杖を持っており、子どもは杖の先を持って先導するのである。内戦前に、村から徒歩で数時間の距離にある、原野の中の家畜キャンプや漁労キャンプに滞在したとき、そこにも目が見えない老人がいた。子どもに先導されて、原野を歩いている老人にも出会った。これも、こうした「障害」を持つ人たちが、人並みに生きていることの例である。

日本の社会なら「特別扱い」を受けるべき人びとが、保護も隔離もされずにふつうに暮らしている。こうした状況をどう捉えたらよいのだろう。パリ人の社会では、私たちが理解しているのとは異なる共生が実現しているといってよいのではないだろうか。私はこれを「原野の共生」と呼びたい。これは、思いやりや慈善にもとづく共生とはおおきく異なる世界である。この問題について、パリの友人たちと議論したことはないので、以下は私の推測だが、このパリ的共生を支えているのは、運命主義と寛容な人間観であると思われる。戦争がなくても、人は病気や事故で容易に生命を失い、さまざまな身体的ハンディキャップを抱えた人が身のまわりにいることがふつうの状況のもとでは、人びとはその運命を受け入れるしかないのではないだろうか。また、パリの人たちは、身体的ハンディキャップを負っている者だけでなく、変わり者や乱暴者、酔っ払いなどに対する寛容度が高く、こうした人たちが除け者にされることはない。

運命主義と寛容な人間観と対になっているのが、辛辣でドライなユーモア精神である。身体的ハンディキャップを含む「ふつうでない」特性は、私たちの社会では話題にすることを避けるが、彼らは本人がいる席でも公然と話題にすることがよくある。しかも、からかいの対象にするのである。こうしたからかいに続くのは沈黙ではなく哄笑である。そして、からわられた本人は、意気消沈したり怒るのではなく、機知と機転をもって言い返すことが期待されている。単純に言えば、「不幸を笑いとばす」ということだ。

あるとき、酒席に小児麻痺を患った男がいた。彼の障害は重く、杖を頼りに歩くこともできなかった。両手と両膝を使って、這うことが移動の手段であった。ある男が彼のことを話題にした。「昔、こいつは夜中に用を足すために村の外に行った。そうするとハイエナに襲われて、頭にかみつかれ、引きずられかけたんだ。こいつは、『ひぇー、ハイエナに咬まれた。助けて！』と大声でわめいた。『ひぇー、ハイエナに咬まれた。助けて！』」。これを聞いた私たちは大笑いした。本人はというと、一緒になって笑っていた。そして「いやぁ、あのときはほんとうに死ぬかと思ったよ。まだ頭に傷が残ってるよ」と言い、また皆で笑ったのだった。

小児麻痺を患った身体で生きていくのは、たしかにたいへんだろう。この男は、もう一歩のところで、ハイエナの餌食になるところだった。しかし、この場面で、私が感じたのは、ある種のすがすがしさや爽快さであった。不幸を笑い飛ばすこと、不幸な出来事を皆で哄笑の材料にすることは、私たちにはまねのしにくい、共生の技法であるといえる。

さて「原野の共生」を理解するには、パリ人と国家や政府との関係についてみておく必要がある。パリ語には「障害者」というカテゴリー

は存在しないし、そうした人びとが特別扱いされるべきであるという考え方もない。そもそも、身体的ハンディキャップを負った人や、伝染病にかかった人が、公的な支援や保護を受けたり、隔離されたりすることはない。ここでの「公(おおやけ)」は、中央と地方両方の政府という意味である。19世紀半ば以降、南スーダンはいくつかの国家の支配を受けたが、いずれの国家の統治も脆弱であり、人びとにとって国家は遠い外部の存在にすぎなかった。ときたま人びとの日常に介入することがあれば、国家はきわめて暴力的なかたちで現れた。軍隊による攻撃や掠奪はその典型である。したがって、「われわれの国」という意識は希薄であり、国というのは保護を期待する存在ではなく、できるだけかかわりたくないというのは、歴史的経験に裏打ちされた人びとの感覚であるといえる。

内戦前のパリの村には、国家の存在の証(あかし)はたしかにあった。それは数えられるほどのもので、行政の末端を担う首長、数名の警察官、小学校、それに薬品はほとんど無く、設備もなく、医療助手はいつも朝から酔っぱらっている診療所であった。内戦が始まると、こうしたわずかなものも姿を消し、パチディ村にはなにもなかった。内戦終結の結果、2005年には新しい政府が樹立されたが、新政府の役人がこの村を訪れたことはなかったし、NGOの関係者さえも来たことはなかった。

「原野の共生」は、こうした状況下で成立しているのである。それは、究極の自己責任と自助の世界といってよいだろう。これは、私たちからはあまりにかけ離れた、遠い世界なのだろうか。じつは、私はそうは思っていない。

私たちが、社会的弱者に対する支援や保護を考えるとき、まず思い浮かべるのは「公的」な、つまり政府や地方自治体の制度のことである。同時に、この十数年のあいだに、国家と政府に対する信頼は著しく低下してきた。日本という国家は、つい最近まで考えていたほど確固としたものではないようだし、日本の政府も、私たちが期待していたほど国民の生活を第一に考えているようではないようだ。

こうした認識は、とりわけ「3.11」以降、強くなっているように思える。かつては、私たち全員の福祉と安寧のために堅固に構築されていると考えていたものの、突然の破綻 …。近代の日本では、国や政府が占めていた「公(おおやけ)」の領域があまりにもおおきかった。もちろん、「お上(かみ)」が「公」と等しいわけではない。私たちはそろそろ、国や政府とは関係ない「公」を構想してもよいのではないだろうか。それは、とりもなおさず、「国家の外の共生」を想像することである。これはすでに各地で、さまざまなかたちで実現しているのだろう。こうした試みに注目し、より一層進めていくと同時に、「国家の外の共生」という思考実験を続けていかねばならない。そのさい、「原野の共生」は重要な参照点になると私は考えている。

付記　本エッセイの執筆にさいして、中川理の論文「国家の外の想像力」(『社会人類学年報』40巻、2014年)から示唆を得た。